

日米の社会と教育

石坂 公成

日本に帰ってきて不思議に思った事は、個人的につき合えばアメリカ人と日本人の間には本質的な違いを感じないのに、社会としてみるとアメリカと日本の間には大変な違いがあるという事であった。私の考えでは、両国の社会の相違はアメリカが多民族国家であるという事に基因しているように思われる。アメリカには世界中の主な民族のほとんどすべてが住んでおり、それぞれの民族は習慣も宗教も違い、従って物の考え方も違っている。この様に多種多様の人間が集まって一つの国をつくる唯一の方法は、それぞれの民族が他民族の習慣や伝統を認めてその長所を尊重し合う事である。異質のものを理解してその存在を認めるといふ原則が保たれない限り多民族国家は存続し得ない。これはアメリカの宿命である。

アメリカの社会は長い時間をかけてこの宿命に対処するようにつくり変えられてきた。例えばアメリカの初等教育で最も力が注がれる事は、自分と違った環境や考え方を持っている友達を理解しようと努めること、そして自分の考えを他の子供に理解させるためにはどうすればよいか？を自ら体得させることであって、数の計算や読み書きは二の次である。この国では他の人

に迷惑をかけない限り、他の人と違う習慣や考え方を持っている事は一つの特徴として認められる事なのである。子供の社会でリーダーになるのは、自分の考えを多くの友達に理解させる事が出来、しかも多くの異なった子供たちの考えを理解できる子供なのである。日本では“よい子”という一つのイメージがあつて、その規格から外れた事はすべて直さなければならぬようだが、アメリカでは特徴を持つことは長所なのである。アメリカの学校で“日本的ないじめ”がないのは、この様な教育によるものである。アメリカの子供たちがたたきこまれた原則によれば、本当は賛成していないのに強い子に同調するとか、まして多くの子供が一緒になつて一人の異質の子供をいじめるといふ事は卑劣な行為であつて軽蔑されるべき事である。学校の方も、理由は何であれこのような行為自体が最も大切な教育方針にもとるものなのだから厳罰をもつてのぞむのである。

最近問題となつてきている校内暴力も教育の欠陥によるものと思つた。教育者としての私の体験からすると、教育者の仕事は子供の長所を見出してそれを伸ばす事にある。どんな子供だつて長所のない子供はいない。もちろん、社会に迷惑

を及ぼすような欠陥や本人の将来に差し支えるような弱点は治してやらなければならぬが、それはあくまで長所を伸ばすためである。日本の学校が憂うべき状態になつてしまつた原因のひとつは、先生が生徒を管理し評価することをもつて自らの職務と考え、生徒もそのような目で先生を見ている事にあるのではなからうか？教育者は管理者ではない。管理者だつたら、先生と生徒の間に心が通はずはない。もちろん、アメリカの先生と生徒の関係は本質的に異なつている。

多民族からなるアメリカには多くの困難があつた。これを克服するために彼らがあつた道は、多様性を認めてそれを前向きに活用することであつた。そのおかげで個性を尊重する社会が生まれたが、それがアメリカの強みになつたのである。日本でも国際性とか規制緩和とかが叫ばれているが、教育界を眺めるとむしろ時代に逆行しているようにみえる。親も先生も、子供たちになるべくよい学歴、あるいは人並みの学歴を持たせるといふケチな目的に汲々としているためか、生徒を一定のワクにはめようとすることは昔よりもひどくなつていゝのではないかと思つた。子供たちが規格から外れない事を目的として教育されていたのでは個性ある人間が育つわけはない。独創性のある人間を育てるために必要なことは、特殊な才能をもつ子供を発掘するための制度ではなくて個性を尊重する教育なのである。子供の社会が個性を尊重するようになるには自然に独創性のある子供が育つてくるはずである。その意味では、教育改革に最も必要なことは社会、ことに教育者の意識改革である。

(日本学士院会員・山形市蔵王半郷)